

占領下八重山における教育とペスタロッヂ祭に関する考察

— 第1回ペスタロッヂ祭の企画、開催経緯に注目して —

村 山 拓

A Research on the situation of the education and the Pestalozzi Festival in Yaeyama area under the occupation — Focusing on the process of the planning and holding the first Pestalozzi Festival —

Taku MURAYAMA

Abstract

This paper aims at the historical analysis on the situation of the education in Yaeyama area in Okinawa under the governance of the military administration by the United States. Especially, this research takes notice of the cultural campaign by the Yaeyama Education Society (Yaeyama-Kyoiku-Kai) and the inauguration of the first "Petalozzi Festival" by the teachers in this district.

Pestalozzi Festival commemorate Johann Heinrich Pestalozzi(1746-1827), a Swiss educational theoretician and practitioner. He never came into Japan, and Okinawa, but many educators in Japan commemorate him and success his thought. In Yaeyama area this festival started in 1949, and it has been continuing for more than 50 years without the interruption. The case of this festival is never seen in another area in Japan.

After the battle in Okinawa was finished in 1945, the military government started the adopted the policies in Okinawa in the different way of the one in mainland Japan. In Yaeyama, the original "Yaeyama Education Act" was in force, and the school organization was 8-4 system by 1949. Yaeyama Education Society established in 1948, and the first festival is in 1949. This research attempt to make the situation of the society and of the first festival be clear.

Key-words: Pestalozzi Festival, Yaeyama Education Society, teachers' association, education in remote areas

はじめに

一、沖縄戦終結前後の八重山における教育状況と八重山教育会の成立

1. 沖縄戦終結前後の教育状況

2. 八重山教育会の成立と展開

二、ペスタロッヂ祭の企画と第1回ペスタロッヂ祭

1. ペスタロッヂ祭の発足をめぐる事情

2. 第1回ペスタロッヂ祭について

まとめと今後の課題

はじめに

第二次世界大戦後、沖縄は米軍占領下におかれ、日本本土とは異なる独自の統治を経験した。行政全般と同様に、教育体制についても、米軍統治下で4～5年の間、独自の学制が布かれ、貧困と不十分な設備の中での教育活動が続けられていた。

本稿では、沖縄県南部にある八重山地方における、沖縄戦直後4～5年のあいだの教育事情や文化状況について概観すると同時に、教員組合としての活動を展開した八重山教育会¹とその活動の一つである「ペスタロッチ祭」について、特に第1回の同祭をめぐる状況について考察することを目的としている。ペスタロッチ(Pestalozzi, Johann Heinrich, 1746-1827)は言うまでもなく、スイスの教育者であり、ノイホーフ貧民学校、シュタンツ孤児院などでの貧民児童、戦災孤児の教育に尽力した人物であり、労作教育などを基に人間教育、子どもの自主性の確立を目指した人物である。日本は、「世界随一のペスタロッチ・ファンの国である」と言われている²。実際、ペスタロッチ祭は日本国内でいくつかの例がある。阿波根直誠(1976)によると、日本で最初に行われたペスタロッチ祭は、1906(明治39)年に東京師範学校と京都師範学校で開催されており、沖縄では1910(明治43)年に「ペ氏記念会」が催されたのが最初であるとされている³。それ以外にも1921(大正10)年に長田新が広島大学で開き、それが広島大学で1973(昭和48)年まで開催されていた。また東京教育大学では梅根悟によって1957年から開始され、東京教育大学の廃学以降も筑波大学で引き継がれ、開催されてきた時期があった⁴。ただ、戦後すぐに開始され現在に至るまで50回以上、一度の断絶もなく継続しているペスタロッチ祭は八重山以外に例が見当たらない。その成立背景について注目する研究は阿波根直誠によって以前から進められている⁵。その中で阿波根はペスタロッチ祭を可能にしたものとして教育復興のためのエネルギー源と評価している。その後、本土復帰運動の中核の一翼を教員組合が担ったという事実を考えても、教育復興のエネルギーとして、また連帯の契機としてペスタロッチ祭が意義ある機会であったことを考えても、この評価は妥当なものであると考え

られる。

本稿ではペスタロッチ祭の成立と展開は分けて考察する必要があると考え、第1回ペスタロッチ祭の開催をめぐる事情に焦点を当てることにしたい。まず沖縄戦終結前後の八重山における教育事情について概観した後、ペスタロッチ祭の主催団体である八重山教育会の成立と、同祭の企画、開催の経緯について検討する。そしてペスタロッチ祭がどのように受け入れられたのかを当時の新聞記事などで見た後、最後にペスタロッチ祭の成立要因について傍証を試みる。

一、沖縄戦終結前後の八重山における教育状況と八重山教育会の成立

1. 沖縄戦終結前後の教育状況

沖縄における実質的な戦闘の終結は、1945(昭和20)年6月23日とされているが、それと前後して、アメリカ軍政府はいわゆるミニッツ報告の布告をはじめとする実質的な沖縄統治を既に開始していた。行政全般のコントロールの一環として、教育活動もその統治下におかれるものであった。

米軍による八重山統治は、その時期、形態などは沖縄本島と全く同一の過程をたどったわけではないが、同一政策が時期をずらして施行されたり、沖縄本島、宮古などを含めた全般的な政策の対象となる場面もしばしば見られた。後述するが、八重山の教育関係者たちが、新学制の導入にあたり、沖縄本島や宮古の状況に目を配っている様子も見られ、ここでは必要に応じて沖縄本島などの政策移行にも言及しつつ、八重山の状況について検討することとしたい。

1945(昭和20)年12月28日、米国海軍チユース少佐は軍布告にもとづき、仮自治政府として八重山支庁を復活させ、支庁長には、八重山自治会、町村長、部落会長、各種団体長によって選出された宮良長詳を任命した。12月30日には軍の指示を受けた各部長を発令、さらに支庁の組織陣容を整えて1946(昭和21)年1月15日、軍政下における八重山支庁の開庁式が行われた(当時の文化部

長は安里榮繁)。また、1945(昭和20)年12月23日、民権及び行政府 各省庁権限に関する布告を出し、ここで学校組織などについては規定を加えている⁶。

阿波根(1997)によると、沖縄本島南部で依然戦闘が行われていた頃、八重山では1945(昭和20)年6月、日本軍による避難命令が出された頃から、組織的、継続的な学校教育は行われず、わずかな教師が避難小屋や防空壕で近隣の子どもたちを集めて教科書やノートのない教育を続けていたところもあったとされる⁷。ほどなく沖縄戦は一応終結しており、ポツダム宣言の受諾、連合国軍による本土統治の流れの中で、「沖縄政策」は若干異なる経緯で進められたようである。同年12月23日、民権及び行政府各官庁権限に関する布告が出され、さらに1946年1月、連合軍総司令部覚書として日本政府に行政分離宣言が出される。

米軍政府による統治の最初期の学校体系についてまず概観したい。1946年7月1日、従来の国民学校を初等学校と改称することとなり、従来の初等科、高等科が廃止され、初等学校が第1学年から第8学年までの8学年制となった。教科書については、当初八重山で独自に編纂されていたものから、やがて沖縄文教部から送付されたものが使用された。この頃の学校教育は相当困難を極めたものと思われるが、その一例を次の内容に見ることが出来る。石垣国民学校と伊原間小学校について、次のように様子を知ることが出来る。

・九月二〇日

「終戦トナリ召集サレタ職員モ解除ヲウケ帰還、九月中旬ニハ全職員出揃フ。

ヨッテ本日、戦後ノ教育実施ニ就キ、職員会ヲ開キ打チ合ス。出席日ノ通知並ビニ出席督励ト対策ヲ講ス、出校日ハ五日ニ一回ト定メ、他ハ食糧増産日ト定ム。

・一〇月

「出校日ヲ制定シ出席ノ督励ヲナスモ、児童モ父兄モマラリア羅病ト餓死ニ近キ食糧難ニ禍ヒサレ児童ノ出校スル者僅カニ三、四〇名にして敗戦ノ惨状唯々傍観ノ止ムナシ。」

以上のように敗戦の混迷のなかで糊口をつなぐのに必死

で、正規の授業などできるはずがなかった。⁸

沖縄の教育の実権は、米国民政府の管理統制下にあり、布令布告による認可を得なければならない体制にあったため、直接、日本の教育基本法や学校教育法が沖縄まで力が及ばなかったのである。学校は再開されても教育の目的も目標もさだかでなく、何をどう教育してよいか教師にとって悩むところであった⁹。

昭和二十二年には、長期に亘る男子教師一人による分校経営であったが、この年(注、昭和24、1949年)の四月より初等学校になって教員一名の増となり、宇大浜より宮良浪(現辻野)教師が赴任された。

そのため、一棟一教室の茅ぶきの仮校舎を建て、一、二、三年の低学年は浪先生が担当され、四、五、六年の高学年は善盛先生が担当という学校有史以来はじめての教師二名による学校経営となった。児童在籍も三十名となっていた¹⁰。

経済的困窮と同時にもっとも八重山の住民を苦しめたのはマラリアであった。沖縄県教員組合八重山支部の委員長を務めた藤田長信は、ペスタロッチ祭30周年の1979(昭和54)年に次のように証言している。

「その頃の八重山は敗戦後四年の才月を経過しているにも関わらず、住民は食糧不足にあえぎ、且つマラリア猖獗によって悩まされ、生きるに精一杯の暮しをする飢餓の状態であった。かかる困窮状態下における児童生徒の教育も、学ぶどころか家族総ぐるみの芋作りをしなければ生活が出来ず、そのために子供達は午前は学校へ、午後は芋作り、芋掘り或は薪拾いにしいられ、休むいとまもない状態であった」¹¹。

2. 八重山教育会の成立

このような教育事情を背景として、八重山教育会は成立している。八重山においては、戦前からの教員による組合的組織は大小複数並存する形で継続的に活動が続いていた¹²。後述するペスタロッチ祭30周年を記念する記念誌の中で、沖縄県教育組合八重山支部の当時書記長であった前津武は、内部資料をもとに、沖縄県教育会八重山郡部会の定期総会が大正6(1917)年8月27日、大正

7 (1918) 年8月22日、大正10 (1921) 年3月にそれぞれ開かれていて、八重山教育会の前身にあたる組織が、大正初期から活動を継続していること、昭和12年8月5日の総会において、沖縄県八重山教育会と名称変更し、現在の活動に近いかたちを取りつつあったこと、1946 (昭和21) 年八重山郡教員組合の結成に際する趣意書によると、16校で164名の組合員によって結成されたことを、明らかにしている¹³。

1948 (昭和23) 年3月26日、午後2時から、石垣国民学校から改称された石垣小学校において教育会発会総会が開催され、「教員組合ニ於テ確認サレタ教育部会、教員組合ヲ統合シタ教育会」として八重山教育会が発足している。会長はその前年から八重山高等学校の校長をしていた平良文太郎 (1947.5.21から1949年3月頃まで在任) であった。平良文太郎は、もともと英語教育を業とする教育者であり、八重山での新制高等学校の設置のため沖縄本島から派遣された教師であった。平良は沖縄本島へ召還されるまでの期間、八重山高等学校校長、また八重山教育会の会長として活躍すると同時に、この地域で出版されていた雑誌、新聞等にもたびたび寄稿、あるいはインタビューに応じるなどの活発な発言が多く、この時期の地域文化の創造、水準の高揚に相当な貢献のあった人物であると考えられる¹⁴。副会長には戦前から数校の校長を歴任している糸数用著を選出した。

同会は、同1946年4月13日午後2時から、八重山高等学校で評議員会を開催し各部部長を選任している¹⁵。各部部長、常任幹事は次の通りである。

調査部長、崎山用喬

企画宣伝部長、坂名城長輝

福利厚生部長、高良鉄夫

常任幹事、 庶務 南風原英芳

会計 豊川善信

後述するペスタロッツ祭の実質的企画に深く関わる坂名城長輝は1947 (昭和22) 年10月31日から石垣初等学校校長として活躍し、ペスタロッツ祭直後の1949 (昭和24) 年4月1日から学制改革により名称、組織の変更がなされた石垣小学校の校長を1951 (昭和26) 年3月31日まで務

めている。

八重山教育会の成立については、1949年12月10日の同会発刊の雑誌『新世代』第四号の中で、発足当時副会長、この時期会長であった糸数用著が次のように運営、経緯について説明している。

「われわれは、敗戦後のこんとんとした中に従来の教育部会の外に、教員の生活擁護と教権確立の二大スローガンをかゝげて教員組合を結成し、更に昨年 (注、1948年) の三月、会員の総意によって組合と部会が合併し、その事業と財産を引ついで、八重山教育会が生れ、教権を確立し民主主義教育の徹底をはかり郷土の興隆に資することを目的として、新しい希望と力強い実践をちかづて出発したのである」。¹⁶

八重山教育会は、教員組合としての活動の一環として、雑誌『新世代』を発刊している。発刊のペースは明確ではないが、創刊から数年は、年に3～4号のペースであったと考えられる。1948 (昭和23) 年12月24日発行第一巻第一号の巻頭言で、当時会長職にあった平良文太郎は、次のように記している。

「此度八重山教育会が発表機関を持つことになったが、教育は学校と教員だけの狭い事ではなく、社会万般と密接不離の繋がりを持つてゐる以上、この誌上で、有りと凡ゆる問題を各方面の方々に論じて戴き、お互いの理解協力の機関とし (中略) 自由な立場の言論機関として、広く新しい世代を進める一助に度く、・・・」¹⁷

ここで平良文太郎は、「社会万般と密接不離の繋がり」、あるいは「有りと凡ゆる問題」といっており、雑誌『新世代』は教育会の機関誌ではあるものの、教育の専門、非専門を問わない総合誌としての性格を持たせようとしている姿勢がうかがえる。これは、約1年後の1949 (昭和24) 年12月10日発行の同誌第四号で当時の企画宣伝部長であった宮城信男が同じく巻頭言で「これまで広く一般大衆をも目標としていた総合雑誌を、これからは教育者自体を対象とする専門誌に切りかえようというわけである。」と述べていることから判断出来る¹⁸。発刊から

わずか3号での方針転換ではあるが、総合誌としての出発を目指した点については、ここでは同会の編集方針を示しておくことには意義があると思われる。

創刊号では、総合誌としての性格を打ち出す意味もあってか、座談会の特集として、「八重山の政治を語る」と題したものが組まれている。座談会のサブテーマは、「生活安定と政治」「政党と政治」で、民主党側から柴田米三、石垣用中の2名、人民党側から浦崎純、潮平寛保の2名の政治家が出席し、八重山教育会からは平良会長、糸数副会長、坂名城企画宣伝部長、富村同副部長、大濱編集長が出席して、10月25日に八重山高等学校にて開かれている¹⁹。

軍政府と八重山教育会の関係はどのようなものであったのであろうか。その関係を具体的に示す実証的データは今のところ見当たらないが、軍政府の情報教育部長アーサー・ミード（Arthur Mead）のメッセージが『新世代』に掲載されている。これは同教育会の要請等を受けてミードが直接寄稿をしたものというよりは、何らかの形で公告されたものを平良文太郎が訳出、掲載したものと考えの方が自然であろう。軍政府が八重山教育会についてどのような見解を有していたか不明である。そして1952年7月4日に同教育会が改称した八重山教職員会、その後の教員組合が復帰運動の中核を担って軍政府と対立したことなどを考え合わせると、両者の関係はその後の展開を見据えつつ慎重に検討する必要があるが、八重山教育会が軍政府の動向、意向を注視していた事実はこちらで確認しておいてよいだろう。ミードは、琉球諸島に於ける「新教育」として、「進歩主義教育とは未来のための教育である。（中略）進歩主義の学校とは生徒が活動の中心となり、それぞれの子どもが技術と能力を発揮できる学校である」とし、特に進歩主義教育、個人の人権を基礎とする教育を強調している²⁰。

さらに、この時期の八重山は新学制の施行直前の、教育の大変革期にあたっていた。新学制は、沖縄本島では1947（昭和22）年から、宮古では1948（昭和23）年から施行され、八重山でも1947（昭和22）年頃から検討が進められていたが、1949（昭和24）年から本格実施することになり、準備が進められていた。

新学制は現在でも見られる6-3-3制であるが、軍政

下での旧学制では次のようになっていた。『新世代』に掲載された編集部による「解説 新学制 六三三制度の輪郭」では、「現在八重山には八、四の制度と六、三、三の制度の二本建であるが、六、三、三の学制を全面的に布くと、新旧学制の比較は次のようになる」として説明が加えられている²¹。

年限	学 校 種 別		
12	実業高等学校 (農、水、工：4年)	農林高等学校 (農、林：4年)	高等学校 (文、理：3年)
11			
10			
9			初等高等学校 (3年)
8			
7			
6			
5			
4			
3			初等学校 (8－6年)
2			
1			
	幼 稚 園		

（『新世代』第一巻掲載の比較対照表をもとに筆者作成）

新学制へ向けた協議について当時視学を務めていた大濱孫佑は次のように書き記している。

「一九四九年一月二十八日に校長会議を開き、文教部で起草した教育基本法、学校教育法の両法案を審議して貰った。此の両法案とも本土の法を殆んど取り入れ、軍制下にある八重山に合う様に幾らか字句をなおしたものであった。そして同年二月三日には教育審議会を招集し教育両法案の審議をして貰い二月二十五日には学制改革に関する件、実業高等学校廃止の件、教育基本法、学校教育法に関する件、を八重山議会に提案する準備を進めていた。一九四九年三月末日には総ての準備を整え、四月一日に教職員の異動をなし、遅くとも四月十五日迄には新制中学の新学年始業式を行うこととした。」²²

ペスタロッチ祭はまさにこのような新学制施行前夜の教育変革期に施行されたものであった。次章では、第1回ペスタロッチ祭の企画と内容について、経緯の推移と新聞等に見られる反響を中心に見ていくこととする。

二、ペスタロッチ祭の企画と第1回ペスタロッチ祭

1. ペスタロッチ祭の発足をめぐる事情

ペスタロッチ祭が八重山教育会によって企画されたのは、1948（昭和23）年に入ってからのことである。同会の企画宣伝部（当時の部長は坂名城長輝）によって企画、提案され、同年6月8日に八重山高校で開催された評議員会で了承され、さらに同年7月30日の定期総会で決議された1948年度の事業計画には次の項目が盛り込まれている²³。

1. 八重山教育の発刊（年6回）
2. 職員のバレー大会（8月中旬）
3. ペスタロッチ祭（教育講演会、合同学芸会）
4. 巡回文化講演会（経費各部落負担——夏季休暇中）

このように、年次計画の柱として列記されていることから、ペスタロッチ祭が八重山教育会の初期の行事として大きな位置づけを有していたことが分かる。では、ペスタロッチ祭の提案者、創始者は誰であるのか。これについて確定するのは現時点では非常に困難である。阿波根（1997）は「特定することは極めて困難であるというのが現況である」とした上で、糸数用著、高宮広雄、坂名城長輝を有力な候補としてあげている²⁴。糸数用著は既に述べた通り、八重山教育会の当時副会長であった人物であり、高宮広雄はこの頃文教部長の職にあった。坂名城長輝は同教育会の企画宣伝部長である。

糸数用著については、宮里英詳が「戦前、（注、糸数）先生が勤務しておられた東京の学校でペスタロッチ祭が行われていて、それを先生が意見され—事実は私には不明—戦後の八重山教育会の恒例の行事としてとり入れられたのだと、誰言うともなく聞かされていた」²⁵と書いており、企画の中心にいたことをうかがい知ることができよう。また、坂名城長輝と高宮広雄については第1回ペスタロッチ祭の後援者でもある大濱孫佑が次のように述べている。

「一九四九年二月の或る日の午後に今は亡き坂名城長輝

先生が当時の文教部にお見えになり高宮（広雄）部長と笑いながら話しておられたが、やがてゆつくりと私の前においでになって『実は今、部長とも話したが今度来る十七日、ペスタロッチの亡くなった日にペスタロッチ祭をして八重山教育に活気を入れようと教育会と文教部が共催する事を部長と話し合ってきたのだ。部長も喜んで共催を約してくれたよ、その事に就いて今度は君に話しがあるのだが』と言葉を切って白い歯をのぞかせニコニコしながら私の顔を見られた」。²⁶

ここでの大濱の証言にも見られる通り、第1回から数回のあいだ、ペスタロッチ祭は八重山教育会と八重山民政府文教部との共催で開催されている。しかし具体的に誰がどのような役割を担ったのかについては、まだ十分な解明は出来ていない。しかも、八重山教育会の役員選出過程をみると、同教育会の役員が全て選出され終えたのは1949（昭和24年）の夏以降であり、第1回ペスタロッチ祭は、役員も総て揃わないうちに行われたことになる²⁷。しかも、文教部が共催することが決まった坂名城長輝と高宮広雄の会談は同祭の開催直前の2月であるから、文教部からは、窓口として高宮広雄、講演者として大濱孫佑を出した以外にそれほど大きな人的な貢献があったとは考えにくく、事実上、八重山教育会の糸数用著と坂名城長輝を中心に、平良文太郎会長、坂名城長輝以外の2名の部長と常務幹事の2名がバックアップする形を取っていたのではないかと考えられる。

2. 第1回ペスタロッチ祭について

前項では大まかであるが、第1回ペスタロッチ祭開催の経緯について概観した。その内容は次のようなものであった。開催は1949（昭和24）年2月17日（木曜日）、会場は石垣市内の沖縄劇場であった。講演者は3名おり、八重山教育会、文教部、一般からそれぞれ1名ずつが選ばれ、それぞれ次のようなテーマで講演を行っている。
教育雑感：崎山用喬（初級高等学校長）
ペスタロッチの教育思想：大濱孫佑（文教部視学官）
医師の見たる精神生活：崎山毅（医学博士）

それぞれの講演内容についての詳細は分かっていない

が、1949（昭和24）年2月21日（月曜日）付の自由民報第六十六号には、次のように記されている。

「ペスタロッツ祭記念講演会大盛況 崎山博士 崎山校長 大濱視学結論のない話 そして事実と相違ないことを説くあり アメリカ教育制度を説き迫るあり ペスタロッツをたたへるあり」²⁸

この記述から、崎山用喬がアメリカの教育制度について、大濱がペスタロッツの思想の意義について講演したのではないかと推測される。そして教育映画「みんなの学校」、「野球をやしましょう」「狼とムク犬」の放映が合わせて行われている。さらに、17～20日の4日間で、劇（愛の学校、おもと会、みんないい子）、舞踊、合唱及び合奏、理科実験等の合同学芸会といった企画が展開された。ペスタロッツ祭30周年の際、書記長の任にあった前津武は「一般公開され教育会の基金造成につとめると共に教育第一の機運を湧らし強度隆盛の基盤を培うために奮闘するのであります。」と述べていることから、それらの一連の企画で教育活動を社会へ広報すると同時に、資金集めのような活動も行っていた様子もうかがい知ることが出来る²⁹。

教職員のバレー大会は、午後一時から三時まで実施され、参加校は高校付属中、農高、石中、登小、石小、大浜町学校の六チームで対抗試合が展開され、その結果高校付属中が優勝し、引続き三時から懇親会を催し会員の団結を誓い合ったとされる³⁰。

そしてこのペスタロッツ祭の中では、「八重山のペスタロッツ」と通称される西表初等学校網取分教場の教師、入伊泊清光が教育功労者として、八重山教育会長と知事から勤続30年の表彰を受けている。1949（昭和24）年2月17日（木曜日）の『自由民報』第六十五号には、入伊泊教諭について次のように紹介されている。

「教育功労者表彰 入伊泊清光氏の栄誉

本日教育祭にあたり文教部並教育会では西表初等学校教官入伊泊清光氏の多年功績を表彰することになっている 入伊泊清光氏は大正六年七月西表校へ新任以来今日まで実に三十二年有余 網取分教場に敢へて勤務しその間幾多の不り不便を克服し栄轉を考えず熱烈な

教育愛を捧げて一路教育興隆に邁進し 尚社会教化にも絶大なる力を盡し同分キョウ場の今日を建設した功労者で五十二年の歴史の大半は正に同キョウ官の奮闘奉仕の足跡といつてよい 因に同氏の略歴は次の通りである

出生地 竹富町字崎山小字網取 明治四十二年西表小学校卒業 大正二年登野城校高等科卒業 大正六年西表校代用キョウ員拝命 大正十五年尋常小学校キョウ員免許状受領 昭和二十一年国民学キョウ員免許状受領

一年生より六年生までを一人でよく担任 中等学校卒業生二名を出し 實校生の奉仕的指導にあたり 青年会 婦人会 部落会の或いは顧問 或いは相談役としてその功績顕著なものがある」³¹

また、同じく婦人新聞にも入伊泊が「八重山のペスタロッツ」として紹介されている³²。入伊泊についての紹介は前掲の『自由民報』と文面に至るまではほぼ同じであるので、受賞理由を紹介した部分を中心に引用する。

八重山のペスタロッツ 西表の入伊泊さん

（中略）

功績

一 学校教育上

イ 本校を離るゝこと三里 山岳重疊嶮阻にして道路なく 海路によらざれば連絡つかざる僻遠の地に収支一貫分教場にのみ勤務

ロ 一年生より六年生までを一人にて担任（昨年より職員二名となる）

ハ 栄轉 栄進を外に只管恵まれざる郷土師弟のため一生を捧げて来た

ニ かゝる単級小学校たる分教場から中等学校卒業生を二名出した

ホ 實校生の奉仕的指導（無手当）

ヘ 研究の旺盛 特に歴史 文学にはたゆまざる研究を続け 一昨年竹富村地区研究会登校に開かゝるや 読方指導の研究発表をなし当時の玻名城教育課長より賞賛を受く

ト 同分教場創立五十周年記念式に学校長部落会長

より感謝状を受く

二 社会教育上

イ 青年会

青年会の顧問として常に温情と激励を以つて指導を続け青年たちより慈父の如く慕われている

ロ 婦人会

婦人の教養向上のために盡力

ハ 部落会

部落会幹部の相談相手として 常に新時代の方向を示して生活改善運動部落の和親向上に意を傾け常会毎には熱意を以つて指導す

▲附記「趣味」

イ 浪花節

彼の浪花節は實に堂に入つたもの

ロ 演劇

網取青年会の演劇は当学区に於いて秀でている彼の指導の賜物

ここに紹介されている入伊泊清光についても、その教育実践の詳細については定かではないが、その思想の一旦については、彼の文章がペスタロッツ祭30周年の記念誌に掲載されているところから知ることが出来る。

「教育に対する私の考え方」と題されたエッセイの中で、入伊泊は、個に徹する教育、個に生きる苦しみ、子供の生活に即した教育の三つを教育の柱として据えている。

まず個に徹する教育として、児童の個の覚醒と教師の児童への覚醒の「二つの革命」が必要だと主張する。それは、「従来の他律的画一教育に比して個に目ざめた自律的生活学習」として位置づけられる。さらに、「学校生活におけるすべての学習作業は従来のような人生と切りはなされた学校特有の不自然なものとならず人生に連絡した否人生そのものの学習が展開されることになるのである。学校という特殊牢獄から人生の花園への更正、淋しい、冷たい、ひからびた学舎から暖い(原文ママ)うるおいのある人生への再生、之が生活学校であり、これが行詰まった学校教育の生きる道である」。その転換が教育者に出来ることを前提として個に徹する教育を提唱する。

個に生きる苦しみとしては、教育の困苦について述べている。「教育の第一義も子供を愛することでなければならない。個々の子供を愛する心、それがやがて個に徹する教育となる。わが子としての教え子を愛する何んと平凡なことばでしかも何んと困難な道であろうか愛し得ざる悩み—私の心は暗く私の前途は淋しい。しかも私達教育者の生きる道はこれより外にはない」として、教育の困難と自身の経験した苦闘について述べている。

子どもの生活に即した教育の必要性を説く段では、「個に徹する教育は又子供の生活に即した教育でなければならない。子供の生活を見殺しそれと没交渉な教育が個に徹し得ないのは明らかである。(中略)学校教育にもっと子供の生活に即した場を設定してのびのびと子供らしく生活せしめる事が真に正しい強い人間を作る唯一の道であると思う。然して此の原動力は児童への目ざめと教育愛、児童愛にあると思う」としている³³。

入伊泊の第1回での表彰は、その後も新聞で取り上げられるなど、反響があったようである。既に示した自由民報でも、後日高宮広雄が「考へていること」として「網取分教場にもくもく三十二年も教育道に没頭した人がいる入伊泊清光というまれに見る徹底した生き方がある」と入伊泊を紹介している³⁴。

入伊泊の紹介を含め、第1回のペスタロッツ祭は各紙が事前事後にそれを取り上げるなど、八重山圏内でも大きなイベントとなったことがうかがえる。八重山タイムスは2月13日に簡単に内容を紹介した数行の記事を掲載した後、ペスタロッツ祭2日後の2月19日にも「ペスタロッツ祭大盛況」との記事を、いずれも短いながら掲載している³⁵。また海南時報でも、15日に予告が掲載され、ペスタロッツ祭当日にも次のようなコラムが掲載されている³⁶。

「去年までは食うために教壇を去る教師あり今年は人間教育の父をまつるゆとりあり

×

こ食のような子供を教育するために乞食になったペスタロッツの愛貴し

×

島のペスタロッツやがて巣立つ 実力同等以上の□兄弟にも免状興へては如何」

占領下の教員不足のため、臨時教員養成所などで代用教員を養成しないと新しい体制の学校教育を賄うことが出来なかった状況において、ペスタロッツチ祭を契機として教育の質と島内での教員不足の問題に触れたコラムである³⁷。

そして八重山圏内で第1回ペスタロッツチ祭についても精力的に報道したのが自由民報である。第1回ペスタロッツチ祭に約1ヶ月先立って、自由民報はペスタロッツチについてかなり大きく取り上げている。

「ペスタロッツチの言葉

この世の中には全く空々ばく々 無自覚の裡に生活に苦しみながら生て死んで行くこういう人間もある 指物師は指物師 王者は王者で各々の生活の重荷があつてその重荷の下に営々として無自覚の儘に一生を送る人がある 何千といふ人がそういう有様である併しながらそういう何千人或は何万人の間にあつて唯一人違つた人を自分は知つている その人は正しい生活といふことを自分の目標としてをつた 併しながらその人の眞実の価値というものをこの世の中はちつとも知らなかつた 丁度あの石垣を作る時に石工がやくぎな石を砕いて石□の間の隙間を充填するのに使ふそれと同じようにこの正義の人をこそ無情なる世間は叩きくだいて了つた 今やその人はこの世の中に存在しないその人の□□跡はじゅうりんせられた所の足跡がわづかに残つているばかりである たとへていうならばその人は夏の盛り頃にまだ熟しないで青々と木の上に繁り成つておつたところの木の実 その木の実を或る朝北風かさつと激しくふいて来てそれを未熟の儘でふき落して了つた そのふき落された果実にも似ているしかしその果実は無情な風にふき落されながらその根本に落ちて段段腐りながらもかういう自覚を有つた『自分は自分のこの体を腐すことによつて自分を今まで育てて呉れた親木の肥料となり親木を育んで行く役に立ちたい』と そしてこの果実は親木の本で腐つて行つたその親木というのは人道の親木である そのくち果てた人というのは正義を守つた迫害された人であるそして世に忘れられた人である 道行く人よ一□□の涙を注げ

これは彼の著『探究』の最後の結びの所で実に味い深

い言葉です これはペスタロッツチが基督者ですからキリストのことを物語つてゐると考へられますがそれと同時に自分のことをいつてゐると思はれるし或は人類愛に燃へた教育者のことを物語てゐるとも受け取れます」³⁸。

ペスタロッツチのクリスティアニティの精神に基づく貧民教育の業績をたとえ話を織り交ぜながら紹介しているこの記事は、同紙の記者ではなく、社外の教育専門家が執筆したものであると思われる。ペスタロッツチ祭について、同じ中では触れられていないものの、一人の人物についてここまで大々的に取り上げている記事は他紙を含めてこの時期には他に見つからず、それだけ重視されていた様子を見てとれる。自由民報では、ペスタロッツチ祭の当日には「教員の質の向上」と銘打った社説を掲載し、八重山教育基本法体制下にある八重山の教育政策、また教員の資質の問題について大きく取り上げている。

「ペスタロッツチの亡くなった日を記念して教育会が一大行事を催し外には教育の重要性を強調し内には自らのきん持と自覚を新たに云うことは大いに意義のあることである いふ迄もなく今や新しい歴史が創られつつあるしかしてその歴史を創り行くものは新しい人間である更にその人間を創るのかキヨウイクであつてみればきょういくの意義と価値は何人も之を認シキしてゐなければならない筈だ しかるに終戦後の生活苦は兎もすれば食ふことのみを知つてきょういくあるを知らざるかをの如き浅ましさを思はしめた その後既に三年有半混沌は秩序へ破壊から建設へとすべてか軌道に乗りつつある 今にして一切の根本たるきょういくを眞に認シキしそれに力を注かなければ折角の他のド力も延いて歴史そのものか空廻りに終るだろうとおそれるものである 幸にして学制が改まり新しいきょう科書か入手出来 校舎も復舊しつつあり又きょういく基本法草案も成り諸條件が漸く具備して来たが きょう員の充実といふことが何にもまして肝要なることはいふ迄もない その為には昨年四月政党てき感情に災いされたあく人事がきょう養豊かなる文きょう部ちようの明敏なる実行力によつて無能なる或はあく評のきょう員は之を斥け野に埋もれしじん材を

起用する太腹を以て適材適所の好人事に切替えられるとか望ましいそれと同時にきょう員はペスタロッツの如き偉大なるきょういく家を理想とし 人の師たるのをきん持と師たるは難しとの自覚とを持つて自ら勉学修養につとめ あいと誠とを以て生徒をおしへ苟も他の指弾を受ける様な行為のないことが望ましい 一方社会は又教員を尊敬し優遇し彼等が安じて教いくに邁進し得る様な態勢を整へることが望ましい かくて為政当局 教員自体 社会一般三者か 協力して教員の質か真に充実するとき爾余の些々たる問題ではなくなるのである われらわこの機会に更めて教いくの尊重すべきを強調しその為に先づ教員の質の充実を全郡民かど力すべきだと叫ぶものである」³⁹

自由民報では、ペスタロッツ祭後もしばらく同祭と教育問題についての発信がしばらく続いている。その論調は一貫してペスタロッツ祭と主催の八重山教育会に対して好意的である。いくつか例示しておきたい。

「合同学芸会喜ばる 学校 教育会が社会指導に進出せぬ限り他に人なし 力なし 更になし 教育会の労に多謝々々」⁴⁰

『『考へていること』

- もともとわか八重山は教育熱の盛んなところである 近頃世の中がだんだんおちついて来たので社会の教育に対する関心が高まつて来たことは喜ばしいことである
- それにつれて教育界も活気をていしてきた 学制と教育内容かあらたまろうとしている教育会では機関紙新世代を出した 大いにはりきつている たのもしい」⁴¹

このように、自由民報は当時の文教科長高宮広雄が寄稿するなど、文教科との政治的友好関係を保持していた形跡もあり、文教科が共催したペスタロッツ祭には一貫して好意的である。また、八重山教育会に対してもかなりの社会的期待を寄せている様子も見取ることが出来るよう。

まとめと今後の課題

政治的、経済的、文化的、教育面での困窮の中でこのようなイベントがなぜ必要であったのか、またなぜこのようなイベントが可能であったのかを最後に若干考察しておきたい。八重山教育会でペスタロッツ祭が提案された際の提案理由などを直接示すデータは今のところ見つかっていないが、いくつかの記載と文化的状況からの傍証を試みたい。

まず八重山教育会自体が、ペスタロッツの教育思想を前面に出した教育団体ではないということは確認しておかなければならない。八重山教育会がペスタロッツを謳っていたわけではない。例えば、同教育会が発行していた機関誌『新世代』の第一巻第一号には当時初代会長の平良文太郎、同副会長の糸数用著も執筆しているが、彼らを含めて、第一号の中でペスタロッツの教育思想や教育理論に触れた箇所はただ一箇所のみである。しかもそれは、「ペスタロッツの学校でさへ参観人が多くなると情落したといわれてゐる。」として学校の参観者が増えることが教育の質を落とすことにもなるから、参観者があるからいい学校ということではなく、それを誤解しないように戒める内容で登場するのみであり、ペスタロッツの教育思想についてまとまった論説が掲載されるのは第二号である⁴²。その中で、第1回ペスタロッツ祭での講演者、当時文教科視学官であった大濱孫佑が次のように言っていることは興味深い。

「そんな時（引用者注、新学制の準備期で、学校の設備も不十分な時期）にペスタロッツ祭は来たのである。私は内心窃かに喜んだ。タイミングが良いと思った。ペスタロッツも貧民学校を作ったり、また仏軍侵入で戦災孤児の学校を寺を借りてやったりして教育したのだ。満足なものは彼には何一つ与えられていなかったにちがいない。八重山の現状と似ていたにちがいない。ペスタロッツはそうした中から彼独自のすばらしい教育観を立て、初等教育こそ社会改革の根本であると主張し、教育理想を確立し、直観教授と言う方法を発見したではないか。それなら今度のペスタロッツ祭も学制改革を推進する大きな起爆剤になるだろう。と思った」⁴³。

大濱の言を待つまでもなく、八重山の教育界が困苦を極めていたことは既に述べた通りであるが、新制度の確立と教育改革にあたり、八重山教育会、あるいは八重山圏内の教育関係者の中で何らかの形でシンボルを求める向きがあったのではないかと考えられる。1946年の新教育指針にもペスタロッチが取り上げられ、日本全国でペスタロッチが戦後教師の理想とみなされたこともあり、東京での教職経験のある糸数用著、あるいは文教部で沖縄本島への出張経験の多かった高宮広雄が、何らかの形で教師の理想としてペスタロッチを記念することによって、新しい教師像の構築を目指したと考えることはあながち不合理ではない。また阿波根は、当時、ペスタロッチ（教育）祭の企画に携わった八重山の多くの教師たちの多くは、戦前の師範学校出身者であったことにも起因して、比較的容易にこの行事に対する理解が得られたといえる面も考えられると指摘する⁴⁴。戦前の師範学校、特に沖縄師範学校でペスタロッチの教育思想についてどの程度講義されていたのかは不明であるが、戦前日本において、ペスタロッチは既に、経済変動や政治変動の社会の中で悲惨な状況の人間の救済を教育に求めた人物として、「貧民教育の父」、「戦災孤児たちの父」等々のイメージで理解されていたこともあって、そのイメージが八重山における社会復興、平和の追求、教育の創造といった大きな課題の解決の道標となりうると、当時の教育会、文教部のリーダーたちが考えたのであろう。

そしてもう一点、ペスタロッチ祭の直接の成立要因にはならないが、八重山の文化水準を示す事象に触れておきたい。八重山の教育水準が高かったということは、『自由民報』の記事でも紹介した通りであるが、1950年前後の時期に、石垣島内では、筆者が確認している限りで、7種類の新聞が発行されていた⁴⁵。また同圏内で発刊されていた雑誌として、『若い人』、『八重山文化』、『月刊タイムス』、『旬刊南琉』、『新世代』などがある。この島の経済規模、また教師が生活苦を理由に離職したり、食糧増産のために週5日は学校を休校にせざるを得ないほどの占領下の生活困窮、世相などを考えると、比較的高い文化水準を維持していたことをうかがい知ることが出来る。各紙がペスタロッチ祭の成立とどのように寄与したかについては今後検討する必要があるが、特に『自由民

報』が第1回ペスタロッチ祭とそれに関連した記事を事前事後に渡って精力的に掲載していた事実は注目に値する。

最後に、今後の課題を確認しておきたい。

まずはペスタロッチ祭の成立と第1回同祭の開催について、軍政府がどのような立場を採ったのかを検証することである。これは後に沖縄教職員組合が本土復帰運動の一翼を担ったことと考え合わせると、検証しておく必要のあることではないかと思われる。また、米軍政府がなぜペスタロッチを記念することを許可したのかについても検証を要する。本土では米国教育使節団が来日し、米国流の進歩主義教育が普及した。これは沖縄でも新教育の指針としてデューイの思想を基軸とした進歩主義教育が進められており、ペスタロッチの教育思想とその理念を記念しようとする教員の動きにどのような反応を見せていたのかについては明らかにする必要があるだろう。

そして冒頭に指摘した通り、ペスタロッチ祭の展開についても検討を要する事項である。第1回ペスタロッチ祭開催に際しては「継続開催」を決議した形跡は見られず、第1回ペスタロッチ開催後に翌年の開催が決議されている。どのような形で継続がなされたのかを検証したい。さらに、初期のペスタロッチ祭の内容面での大きな柱である総合学会について、本稿では検証が出来なかった。これは、戦後の児童文化活動、特別教育活動のあるフェーズとしても特色のあるものではないかと考えられる。

これらの課題をもとに、今後も八重山における教育運動とペスタロッチ祭の展開について検証していきたい。

謝辞 本研究を進めるにあたり、沖縄教職員組合八重山支部書記長の平地ますみ先生には資料提供の面などでお世話になりました。改めて御礼申し上げます。

文献

阿波根直誠（1997）『『沖縄戦』後の八重山におけるペスタロッチ祭に関する一考察——発足時の動向を中心に——』『米盛祐二先生退官記念論集 沖縄 創造の哲学』米盛祐

二先生退官記念論集刊行会

- 宜野座嗣剛（1985）『新刊 沖縄教育運動史』沖縄時事出版
『婦人新聞第27号』1949年2月20日
- 石垣小学校（1951）『わかめ 創立七十周年記念号』
『自由民報』第五十七号、1949年1月18日
『自由民報 第六十五号』1949年2月17日
『自由民報』第六十六号1949年2月21日
『自由民報第六十八号』1949年2月27日
『海南時報第』1949年2月17日
- 上里善孝（1990）『伊原間小学校史概説』在沖伊原間郷友会
記念誌編集委員会編『ペスタロッツ祭五十周年記念誌』ペス
タロッツ祭五十周年記念事業実行委員会
沖縄県教職員組合八重山支部、沖縄県校長教頭組合八重山支
部（1979）『記念誌』
- 祖納小学校（1954）『創立七十周年記念誌』
- 玉城嗣久（1987）『沖縄占領教育政策とアメリカの公教育』
東信堂
- 八重山文化社（一）『八重山文化』第二二号
- 八重山教育会（1948）『新世代』第一巻第一号
- 八重山教育会（1949a）『新世代』第一巻第二号
- 八重山教育会（1949b）『新世代』第一巻第四号
- 『八重山タイムス』1949年2月13日、2月19日

-
- 1 本稿では、必要に応じて旧字体を新字体に改めた。以下本稿に登場する固有名詞等についても同様に処理した。
- 2 長尾十三二（1998）「ペスタロッツ祭五十周年行事に参加して」記念誌編集委員会編『ペスタロッツ祭五十周年記念誌』ペスタロッツ祭五十周年記念事業実行委員会、p.17。
- 3 阿波根直誠（1976=1979）「沖縄におけるペスタロッツ教育思潮についての試論的研究」沖縄県教職員組合八重山支部、沖縄県校長教頭組合八重山支部（1979）『記念誌』、p.139。なお、同誌には1976年6月30日と日付があることから、阿波根直誠（1976）「沖縄におけるペスタロッツ教育思潮についての試論的研究——その受容過程の史的分析を中心に——」琉球大学教育学部紀要第20集 第一部（1976年12月）ではないかと考えられる。
- 4 近年、ペスタロッツ祭を開催し、普及していこうとする活動について耳にする機会があったが、残念ながら筆者はそのペスタロッツ祭には参加しておらず、詳細については十分に分かっていないので、別の機会に紹介することとした

い。

- 5 阿波根直誠（1997）「『沖縄戦』後の八重山におけるペスタロッツ祭に関する一考察——発足時の動向を中心に——」『米盛祐二先生退官記念論集 沖縄 創造の哲学』米盛祐二先生退官記念論集刊行会、阿波根（1976=1979）前掲論文 p.201。
- 6 石垣市教育委員会（1982）『戦後八重山教育のあゆみ』p.38。
- 7 阿波根（1997）前掲論文。
- 8 『戦後八重山教育のあゆみ』p.31。また同書によると終戦直後の窮場をしのぐべく、私塾などがはじめられた。その主なものをあげると、なかよし学園（塾長富村和史）、蛭雪学園（塾長崎山任）、育英塾（塾長宮良昌英・武洲長武）等がある。
- 9 上里善孝『伊原間小学校史概説』在沖伊原間郷友会、平成3年、p.36。
- 10 同上、pp.38-39。
- 11 沖縄県教職員組合八重山支部、沖縄県校長教頭組合八重山支部（1979）『記念誌』、pp.129-130
- 12 八重山教育会の発足について、具体的にどのような団体が結成に参加したのかについては今のところ明らかではないが、発足総会に際して「教員組合ニ於テ確認サレタ教育部会、教員組合ヲ統合シタ教育会」とされていることから、教員組合、教育部会といった形態をとる、教員の集団が複数存在したと考えられる。
- 13 沖縄県教職員組合八重山支部、沖縄県校長教頭組合八重山支部（1979）『記念誌』、pp.5-8。
- 14 この時期に島内の文化水準は史資料の制約等もあり、推測するのが困難ではあるが、文化活動が活発に行われていたという側面を示す事実として注目に値すると考えられる。平良文太郎の文筆、教育活動とあわせて、今後の検討課題としたい。
- 15 さらに八重山教育会は1949（昭和24）年7月31日午後2時から八重山高等学校で総会を開催し役員を追加選任しているが、これについては、本稿で検討する第1回ペスタロッツ祭よりも後であることから、同祭の企画、発足よりもむしろ同会の継続、活動の展開に深く関わる事項であると思われる。このことについては、改めて検討する機会を作りたい。
- 16 糸数用著（1949）「教育会の運営について」『新世代』第一巻第四号、p.3。
- 17 平良文太郎（1948）「巻頭言」『新世代』第一巻第一号、八重山教育会、p.2。
- 18 宮城信男（1949）「巻頭言」『新世代』第一巻第四号、八重山教育会、p.2。
- 19 本座談会の出席者の、経歴、当時の職階などについては、平良文太郎、糸数用著、坂名城長輝以外については明らかにしていない。今後の課題としたい。

- 20 Mead, Arthur, 著 平良文太郎訳 (1948) 「教育に関するメッセージ」、『新世代』第一巻第二号、p.5。ただし『新世代』に掲載された「教育に関するメッセージ」のタイトルは原文にはない。平良文太郎が訳出の際に、読者の便宜をはかってつけたものと思われる。
- なお、この中でミードは琉球における新教育について次のように整理している。
- 琉球における新教育は次に基礎を置く。
- a.自己表現、相応な家庭生活、行動と思想と言論の保障と安全に対する住民の要求
- b.世界の全ての国の人々に対する愛と理解を持つ基本的な政策
- c.琉球人が平和を意図し、考えているということを世界に対して実証すること
- d.思想の独自性、新制度の発展、拡大、そして幸福と標準的な発達をもたらす科学、教育、信念、社会活動を先導するような国内政策
(『新世代』第一巻第二号、p.5より掲載)
- 21 新世代編集部 (1949) 「解説 新学制 六三三制度の輪郭」『新世代』第一巻第二号。ページ表記は印刷不鮮明のため判読不可能。
- 22 前掲『記念誌』pp.110-120。
- 23 前掲『記念誌』、pp.8-9。この中にある『八重山教育』と同会が発刊した『新世代』の関係がどのようなものであるかについては、まだ明らかになっていない。今後の課題としたい。
- 24 阿波根 (1997) 前掲論文、pp.209-210。
- 25 宮里英詳 (1979) 「ペスタロッツ祭の思い出」前掲、『記念誌』、p.125。
- 26 前掲、『記念誌』p.117。
- 27 1949 (昭和24) 年に選出された、会長、副会長、各部長、常務幹事以外の役員については、前掲『記念誌』に掲載されているものと推測されるが、筆者の入手した資料では該当ページが欠けているため、具体的な名簿を入手するには至っていない。
- 28 『自由民報』第六十六号1949年2月21日
- 29 前掲『記念誌』pp.15-16。
- 30 同上、p.15。
- 31 『自由民報 第六十五号』1949年2月17日
- 32 『婦人新聞第27号』1949年2月20日
- 33 入伊泊清光 (1951=1979) 「教育に対する私の考え方」前掲、『記念誌』、pp.48-49。『新世代』第7号 (1951年1月) 掲載されたものの転載。
- 34 『自由民報第六十八号』1949年2月27日
- 35 『八重山タイムス』1949年2月13日、2月19日
- 36 『海南時報第』1949年2月17日
- 37 占領下沖縄における教員養成のシステムについては、玉城嗣久 (1987) 『沖縄占領教育政策とアメリカの公教育』東信堂に詳しい。
- 38 『自由民報』第五十七号、1949年1月18日。なお引用文中の「□」は印刷不鮮明で文字の判読が不能の箇所である。
- 39 『自由民報』第六十五号、社説「教員の質の向上」、1949年2月17日
- 40 『自由民報』第六十六号、1949年2月21日
- 41 『自由民報』第六十八号、1949年2月27日
- 42 糸数用著 (1948) 「八重山教育の方向」『新世代』第一巻第一号、p.15。森田次郎「ペスタロッツの教育思想に就て」『新世代』第一巻第二号。第二号発刊は三月一日となっているが、この記事には二月三日の日付が記されていることから、ペスタロッツ祭に先駆けて執筆され、何らかの形で教育会会員、あるいはペスタロッツ祭参加者の目に触れたものと考えられる。
- 43 前掲、『記念誌』p.120。
- 44 阿波根 (1997)、前掲論文、p.209。
- 45 婦人新聞については詳細は不明であるが、あとの6紙は3日に一度のペースで発刊されていた。若い人社発刊の週刊誌『若い人』第二巻第二号 (1950年1月24日発行) には、圏内で発行されている婦人新聞以外の新聞について、定期発刊日の一覧が掲載されている。確認されている新聞には、八重山タイムス、南西新報、自由民報、海南時報、先島新報、南琉タイムス、婦人新聞 (ただしこれは沖縄本島で発行されていたものの可能性が高い) があり、また与那国島内でも手書きながら独自の新聞が刊行されていたことが確認されている。
- また新聞の種類が多かったことについては、賛否両論あったこともうかがい知ることが出来る。『八重山文化』通巻22号 (発刊年月日が印刷不鮮明のため未詳。ただし、平良文太郎をはじめとする寄稿者の顔ぶれから、1948年9月頃ではないかと推測される。) には、「ハガキ回答 最近八重山の新聞を読んで」と題された、雑誌社からハガキで問い合わせ寄せられた回答を掲載するコーナーが設けられている。その中で、登野城在住の比嘉政雄は、次のように書き記している。
- 一、小さな町に新聞が多すぎる
- 二、せめて二新聞くらいにして紙数をふやし社説をだすようにすれば、自然にその内容も充実し、また記者の選ぶ材題も品位のあるものになって、いわゆる「いなか新聞」の悪評をあげせかけられなくてすむであらう。
- 『八重山文化 (通巻二二号)』p.20より掲載。